

駄々

鈴木 湊

一番星と二番星を指先で繋いで、百番目を数える頃には夜はとつぷりと更けていた。そうなるともう暖かいベッドに収まってなどいられない。少年は汚れた手提げ袋をひつつかんで寢室をそつと抜け出た。両親に見つからないように細心の注意を払って、鮮やかに裏口から逃げおおせてみせる。そうして自転車に跨り、地面を勢いよく蹴った。さあ急がなきゃ、夜はとても短いからだ。

パレットには鮮やかな十二色。水を含ませた絵筆を執り、想像を形に変えていく。

それは美しいイメージ。

風よりも早く、早く、少年は夜空に水彩具を走らせる。

\*

『月には がいる』

小さな村落の小さな学校は、いまやその話題で持ちきりだった。特にソニアのクラスでは誰が一番早くを生き捕りに出来るかという競争が起こるほどの過熱ぶりだ。男子はめいめい、きらりと光る鉛玉を弾き飛ばすパチンコや吸盤付きの弓矢など、自慢のおもちゃを使って を捕まえてやろうと躍起になっている。ソニアは興奮の中心にはいなかったが、やはりの存在は気になっていたし、出来ることなら自分の手で捕まえたいとも思っていた。しかしクラスメイトから一緒に捕まえに行こうと誘われる度、あいまいな微笑みを浮かべることしか出来ずにいるのも、また事実だった。

ソニアの家は日々のパンにも困るほど貧しく、他の子どもたちが持っているような流行りのおもちゃはひとつも持っていないかったのだ。肝心の道具がないのでは、月にいるなんて到底捕まえられないはずがない。自分が持っているものと言えば道端に落ちていた錆びかけの知恵の輪くらいなもので、他の子が自慢しているような最新式のおもちゃたちは決して手に入ることはなかった。

昨日買ったという星の飾りがついたパチンコを構えているクラスメイトをうらやましく思いながら、ソニアは今日やらなければならない家の仕事を数

えていた。ふと足元を見ると、パチンコが入れられていたビニル袋がぐしゃぐしゃに引きちぎられて散らばっている。そばには袋を結わいていたと見えるぼろぼろの輪ゴムも落ちていた。どうせパチンコは買ってもらえないのだからせめて、とその輪ゴムをつまみあげると、とても高価なものを扱うような手つきで上着のポケットに忍ばせた。

その日もソニアは、学校から帰ってすぐ畑仕事を手伝っていた。夕陽が空を燃やしてまだらに染め抜いたことに気づく間もなく働き続け、水の入った桶を覗き込んだときにやつと夜を知る。丸い水盤に映りこんだ夜空には、月と無数の星たちがぶつかりと浮かんでいた。

野良仕事で汚れた体を清め、豆のスープを腹に入れるとくたくたの体を引きずってベッドに入る。薄い掛け布団を体に巻きつけて、冷たい夜風が吹き込む窓からぼんやりと外を眺めていると、自転車で駆けてゆく少年が見えた。小高い丘を真っ直ぐに横切っていくシルエットはまるで銀色の流れ星のようで、ソニアは思わずうつとりと溜息をついた。素敵な自転車だ。きつと風よりも早く駆けてゆけるに違いない。そうだ、を捕まえられれば、きつと村中の英雄だ。そしたらお金持ちになって、最新式のおもちやだつて自転車だつて、何だつて買ってもらえるかもしれない。それは

すごく、夢のようだな。

思いついたとばかりにベッドから跳ね起きる。かじかんで震える指を椅子にひっかけた上着のポケットの中に突っ込み、そこからぼろぼろの輪ゴムを取り出しているという。を捕まえるに足りそうな道具はこの輪ゴムくらいしか思いつかなかったのだ。

歪んだ窓をむりくり押し開ける。冬の冷えた空気が肌を舐めたけれど、そんなことはどうでもよかった。寒さも忘れて身を乗り出せば窓枠は痛そうな悲鳴を上げた。指に引っかけると、ぼろぼろの輪ゴムは今にもちぎれてしまいそうな危うさで張り詰める。呼吸を止めてすうつと右腕を伸ばし、照準をまっすぐ月に定める。

当たれ！ と心の中で念じて、夜闇に輪を放った。

りんからりん、一瞬の後に鈴の音。

突然耳朶を打ったその音色に驚かされたソニアだったが、しかしそれを見逃すことはなかった。

果たして、輪ゴムの銃で月は揺らいだのだった。

\*

「わからないわ」

「何がだい」

「わからないことがわからないのよ」

「わからないことがわからない？」

「そう」

「君はときどき難しいことを考えるね」

「だつてわからないの。私は何を知つていて、何を知らないのか。わからない」

「それを知ることの意味はあるの？」

「それも、わからないわ」

「ちよつと。なんかないよ」

「でも私、本当に困つてるのよ。このままわからないまんな、放つといつてはいけない気がして仕方ないの」

「もう、ややこしいなあ。じゃあとりあえず、わからないことに出会つたびに『わからないこと』のラベルを貼つていけばいいじゃないか」

「ラベルを貼る」

「そう。そうやつてきちんとラベリングしとけば、わからないことだけとはちゃんとわかるだろ？ そうやつて、自分がわかるものと区別するんだよ」

「それつて、ええと、本当にわからないことがわかつたことになるの？」

「そうなんじゃない？」

「……ああもう、僕、頭がパンクしちゃいそうだよ。ややこしいつたらありやしないね」

「でも、」

「ひゃあ」

「う、わあ」

「……今、揺れたね」

「地震なんてずいぶん久しぶりだね」

「ところで、何の話をしていたんだっけ」

「、ええと、うん、ああ、やだ、忘れちゃったわ」

\*

とろりと濃い蜂蜜色をした液体は、まるで燃え盛る炎のようだ。けれど、柔らかに揺らめくランプの灯にも似ている。とにかく火のイメージだ。熱くて、触れるのをためらわせる。お客用に磨き抜かれている透明なグラスに注いだ液体は、それ自体が熱を帯びているように夕映えの中で光り輝いていた。

少女の家の台所には鍵つきの棚があつて、その中には茶色くて重そうな瓶がひとつ置かれていた。ずんぐりとした熊を思わせる瓶の腹には、白い小さな花の絵のラベルが貼られている。花の絵以外に、何か字も書きつけられているのだけれど、どうにも難しいことばなので少女には読めなかった。

けれど、あれがどういふものかは判る。父はあれを飲むととても楽しそうに笑って頬ずりをしてくれる。上機嫌で、知らない歌をたくさん歌ってくれる。あれにはきつと、人をとびきり楽しくさせる魔法がかけられているに違いない。

少女は謎めいた不思議な飲み物に興味を持つようになっていき、いつの頃からか父がその瓶を取り出す度にちよつとだけでいいから味見させてと母親に頼み込むようになった。しかし、それに対する答えは、

「大人になつてからね」

いつも判で押したように決まっていた。

当然、少女には納得がいかなかった。大人になつてからつて？ 何日後？ 何年後？ そんなの待つていられない。私は今、それが欲しくてたまらないのに。

禁じられたが故の好奇心はくすぶり続け、絶対にあれを飲んでやるんだという決意は日に日に固くなつていった。そして今日、とうとうその扉の鍵が開いているのを見つけた少女は飛び上がりばかりに喜んだのだ。

父は夜にならなければ絶対に帰つてこないし、母はついさつき村外れの雑貨店まで買い物に出かけた。つまり今この家にいるのは、留守番を命じられた私ひとりきり。絶好のチャンスを逃すはずもなく、少女は計画を実行に移した。椅子を柵の前に寄せ、高い位置にある瓶を抱えるようにして取り出す。腕にずしりと感

じる重みは、夢にまで見た魔法の飲み物の存在を実感させた。せつかなんだからとお客用に揃えられた上等なグラスも一緒に取り出して、瓶の中身を少しずつ注ぐ。こぼしてしまわないように丁寧に注いだのと、瓶が想像以上に重かつたのとで、グラスがいっぱいなる頃には少女の腕はしびれてしまつていた。

ひとつの作品を完成させた芸術家のように満足げに頷くと、グラスをじっくりと眺めてみた。バターを溶かし込んだような蜂蜜色は夕焼けのまだらさに似ている。この色だ、と思つた。この火のイメージはこれまで何度も思い描いていた魔法そのものだ。手に届く距離にある未知への胸の高鳴りが、少女を高揚させる。震える指で曇りひとつないグラスを持ち上げ、ゆつくりと唇をつけた。

ごくり、音を立てて淡い魔法を飲み下す。瞬間、目の奥がつんとするような、頭の中で火花が散るような感覚を覚えた。ぐるぐると回転を始める景色に目が回つて、メリーゴーラウンドの中に迷い込んだ気さえする。こみ上げてくる熱に、涙腺を束にして掴まれた。おかしいな、涙が出るのにすごく嬉しい。きつと魔法の効果なんだ、心の中に火がともっている。ほらみてママ。大人じゃなくなつて魔法にかかつたわ。

喉を灼いた一瞬の感覚を、少女は一生忘れないだろうと思つた。

その晩、少女は熱を出した。開きっぱなしの扉と扉の前に置かれた椅子、そして何よりアルコールの匂いをさせた息は状況証拠として余るほどで、結局母親がらこつぴどく叱られることになる。

しかし不思議なことに、少女はちつとも悲しくはなかった。ベッドでひとり、高熱に浮かされる意識の中、白く柔らかな生き物がひそひそ話をしている夢を視ただから。

(月の酒は美味しかったかい?)

\*

シロツメクサの花冠。

あの日原っぱに置き捨てられた、輪廻の輪。私を忘れないで。

世界は変わっていくけれど、私のことを忘れないで。涙の匂いを連れ歩いた日々祝福を。

大人になつてしまふあなたへ救済を。

もう一度、再び出会う日を待っています。

いつか腐り落ち、その輪が閉じられるまで、出会ったことを信じたいのです。

どうか、どうか光あれ。  
シロツメクサの花冠。

\*

おやすみなさい。

どこかの誰かが水彩具で星たちを繋いでいるときに、私は眠りにつきます。

寂しくはないので。ひとりではないから。時を同じくしてベッドに入る誰かを想うのです。

月の見えない寂しい夜は、雲の向こうにその存在を想います。

星の見えない哀しい夜は、何億光年の向こう側に生まれる新しい命を想います。

ね、学校で習ったことも、存外役に立つのです。意外でしょう?

\*

拝啓、子どもたちへ。

君たちが美しいのは、その若さ故であることをここに記す。

若さは愚かさであり、強靱さでもある。大人はどうかやら、そういうものをどこかに放り投げてきてしまったようだ。

その美しさをただ羨ましく思っている私の駄々を、果たして君たちは、笑うだろうか。